

Title	性を語るということ : 「私」でありながら「女性」であるということについての一考察
Author(s)	栗田, 隆子
Citation	臨床哲学. 2001, 3, p. 73-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6609
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

性を語るということ

——「私」でありながら「女性」であるということについての一考察

栗田隆子

0 はじめに

臨床哲学では「現場」から離れず、「現場」に寄りそう知のありかたを考察してきた。¹だが性について取り上げる際、「現場」を即座に指し示し、語ることは難しい。いわば、現場は突然現れる。あるときは会社のオフィスの中で、あるときは飲み会で、そして研究室や授業の中ですらも、突然噴出する。それはいわゆる語りにとどまらず、「お茶を入れる」行為ひとつが、噴出する現場……というよりむしろ「問題」といったほうが一般性はあるが……となる。しかしそれは、「わたしのいるところはいつでも現場」という言説とは決定的な差異がある。「わたしのいるところはいつでも現場」というときは、その領域を毎分毎秒、指摘し、語ろうと思えばできるわけだが、性という領域から現場について考えようとするとき、あとからあれは性の問題だったとわかるようなことが多い。苦しみすらそのときには、感じられないこともある。たとえばセクシュアル・ハラスメントなどでもその場でそれを指し示せずあとからその事態を認識できる場合があることを想起してもらいたい。²

噴出する現場としての性について語るということを中心に、そのただなかで問題が問題であると認識することの困難さ、あるいは、それが問題であると「伝えること」の困難さを明らかにすること、しかしその困難さの輪郭を明らかにするのもまた「語り」であり、その可能性を模索していくことをこの文章を書くことを通じて行なえたらと考えている。しかもそれを語る際は「何者として」語るのか常にみずからの立場も問われつづけることになるのであり、その困難さについて考えてゆくことも狙いの一つである。今回は、いわゆる「事例」そのものを考察するのではなく、性を「伝える」「語る」「書く」「読む」ことを考察している（と栗田がみなした）テキストを対象とする。

事例というものが仮にあったとしてもそれをどのように「読み」「語り」そして「書く」ことができるのかが、「性」について考える際に重要であると私は捉えているからである。というのも「セクシュアリティを語る場はどこにでもあり、どこにもない。」³というように、セクシュアリティ―性と言い換えてもここでは良いと思う―は、語ることそのものがひとつの大きな試みであり、かつ「現場」といっても良い衝撃力を持っている、あるいは持たされているからだ。だからこそ、その「語り」について考察しているテキストを用いることによって現場に迫るということがどうしても不可欠なものとなる。言葉について、結局言葉で考えるというのは不思議な気もするが、違う言葉で語りなおすこと、それこそ「言語は現実を変革する手段として使えることを学ぶ」⁴ことなのではないか。その言葉の力を性について考えることによってもう一度感じられたら、と思う。

1 「・・・わからせるにはどうしたらいいのでしょうか？」

「私たちの運動をわからせるには、どうしたらいいのでしょうか？」これは20世紀初頭に女性の普通選挙権獲得運動をしていたアメリカ女性の言葉である。⁵この言葉は何十年も前のものでありながらアドリエヌ・リッチは「ほんとうにそうだと唱和したくなる」と言う。女性の運動、その運動が立ちあがるゆえの「問題」を伝えるには、「わからせる」ところからスタートしなければいけないことを、なかばいらだちながら彼女(リッチ)は語る。これはフェミニズムと半ば重なり半ばずれているジェンダーそしてセクシュアリティの領域でもまた同じことが言える。この二つも今は便宜上分けているが、この二つも明確に線引きできる概念ではない。⁶この複数一人称を、とりあえず(とりあえずの意味は後述するが、直接の運動としての「私たち」とつながらない「私」という意味をこめて、書き換えてみる。)単数一人称に、そして運動が立ちあがる際の前提を「問題」と書き換えてみよう。

「私の問題をわからせるにはどうしたらいいのでしょうか？」

この問題を「わからせる」には「私」の「経験」を語ればすむ話ではない。というのはおそらく、私の経験は常に純粹に伝わるわけではなく常に、聞き手の枠組み、それは往々にしてある既存の言説に基づいた枠組みでの解釈を施され、その解釈はもはや私の問題意識そのものすらも否定する。たとえばタレントの遙洋子が現在朝日新聞で連載しているコラム「遙なるフェミニズム」のなかで、こんなエピソードがある。彼女が親しくしている野球選手に彼女の最近書いた本(これは間違いなく『東大で上野

千鶴子にケンカを学ぶ』であろう)を読ませたら、その感想として「こんなことを考えているからおまえは結婚できないんだ」と言ったそうだ。いくら私の経験や実感を話しても聞き手の枠組みに回収される危険は常に生じる。そこで「私」を主張しても、単なる個別的な事柄として処理される。そこで語る「私」はスタンダードを揺るがすものには簡単にならない。しかもその聞き手の枠組みというものは、独立に存在するのではなく語り手との関係が常にそこに介在し、時に「愛情」やら「心配」というフレイバーもかけられていく。伝えることの困難さというのはこのような事態を指しているのである。しかし、性について言葉にすること、伝えることを放棄することは「できない」、「すべきでない」という規範を打ちたてるより前に、「わたしは、できない」と言う方が正確な表現になる事態、現状に対する何らかの「違和」の意識(この違和の意識や感覚そのものは即座に感じられるものではないことは前述した通りであるが)を踏まえながら、性について語るということについて考えてみたい。

2 トラブル

セクシュアル・ハラスメントなどの場面での伝えることの困難さだけでなく、この題目、テーマそのものが困難に満ちている。すなわち性について語ること、さらにその性についての問題を「私」という主語を用いて伝えようとすることはすでに困難、困惑、「トラブル」⁷に満ちているといえる。「性」という曖昧な表現をとったということ、さらに、この性を語る「私」とはなにものなのかということ、さらにそれを「伝える」とは何を伝えることなのか。まったくもって曖昧である。

たとえば、性を語る際に考えられるであろう「トラブル(困った)」な点をいくつかあげてみよう。それは多くの疑問符を伴ってあらわれる。

「性について語るとはなんなのか?」「性がまだ現在は語られていないといいたいのか?」「それとも語られすぎととらえているのか?」「そもそも性とはなんなのか?」

性について語るとはたとえば実際の言葉で「男とは」「女とは」と語るときだ。これは(いわゆるジェンダーの領域であることが多いが)「性」を語っていると一般的には言えるだろう。しかしそれは、「何のために語っているのか?」とさらに問うならば、たとえば相手を思うように動かす(もしくはその価値観が自分自身のなかで内面化されていく)戦術として用いられてゆくことが多い。例えば「女性ならば気づかいのある行動をするべきだ」など。となると、いわば性についての純粋な語り、中立的、学術的な語りなどというものはあるのか?と疑いもしたくなる。性についての語りは常

に誰かの欲求やら、戦略に満ちた偏り「トラブル」なものとして浮上してゆく。「遺伝子」というものについて語ろうとするときにさえ、その「偏り」から免れる保証はない。⁸

さらにこのような場合はどうだろうか。性について取り上げているわけでもないのに、『語られている』というときだ。たとえば『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』のなかにこんなくだりがある。

「意見はふとしたはずみで簡単に対立する・・・語り言葉の裏側のメッセージが本番中、痛いほど耳に飛び込んできた。『私はみんなに好かれないの。』女は黙れ・・・(中略)私にはこの第二のメッセージが気持ち悪くて仕方がない。実は、ひとは、本来語り合わねばならないテーマではなく、違うところで議論をしているのではないか？議論を左右するのは、論理ではなく、第二のメッセージのほうが、じつは語っていて、そっちのほうで勝負が決まることが多いのではないか・・・」⁹

言葉は声になるものと、ならないものがある。しかし、このような戦略はひとつの「語り」、「声に出す語りではない選択をした表現」として性は表現されているわけである。セクシュアリティにおける言葉は常に語られている。一見沈黙のかたちをとり、あるいは語り手の語りを誘導するかたちで。しかしどちらも「語り」とは密接に切り離すことは出来ない。いわゆる「ロゴス」を絡め取る形での言葉、それもまたこのジェンダー・セクシュアリティの領域でうごめいているのだ。

そういう、いわば声にならない声をもひとつの「語り」であるとして、性は既に「語られている」という前提にたってこの文章はすすめてゆきたい。

ところで、ジェンダー・セクシュアリティという言葉你敢えて用いず、「性」という言葉で表現したことには、それなりの意味がある。この言葉の選択もひとつの「トラブル」であろう。それはジェンダーもセックスだ、というジュディス・バトラーの指摘を待つまでもなく、私たちはこの曖昧さのなかで性にまつわる言説を用いる。もちろん、これを「セックス・ジェンダー・セクシュアリティ」と用いてきたことにはある戦略的なしかけがある。

だが、しかし、その曖昧さがやはり「曖昧」であることをもう一度見つめながら、そのただ中で生きる「私」というものを主体としておくとき、敢えて、この曖昧な言葉から語り口について考えることに挑戦したいと思う。¹⁰そのことによってこの曖昧な性の現象？言葉？ふるまい？のなかに戸惑いと時には怒りを感じながらも、そこで生き

ていくことのできる、力も生まれるのかもしれない。それは、逆にこの「私」で語ることによる「力」がどこから生じるのか？という問いにもつながるのだが。

それが、何のために「私」で語るのかということの答えとなる。

3 私で語る戦術

この「なおも残る『私』」とは一体なにものなのか？しかも性にまつわる事柄、すなわち英語でいうところのセクシュアリティ、ジェンダーについて語る私とはなにものか。とはいえ、おそらく性を私という主語で語らなければならないのか？と問われたとき、私は心のこわばりを感じながらも、まず一旦は、「はい」と答えるだろう。しかしそこで語る私とはいったい、いかなる性質のものなのか？

まず、性が語られること、その問題意識に執拗にくださっていったのは、やはりミシェル・フーコーだろう。

私のセクシュアリティを告白することが、まさに「語らされる」という臨床医学的コードに乗っていること、「聞く者」または「黙っている者」がその支配の鍵をにぎっているということを『性の歴史』の前半部で描き、「私」で語ることの罫を執拗に明らかにしている。¹¹しかし、それでは「私」という言葉が消え去ることに意味は全くないのだろうか？「私」という言葉を用いて語ることは結局は権力に絡めとられるだけのものにすぎないのだろうか？

しかし、ここでもフーコーが明らかにしているように性は時に沈黙というヴェールをまといながらも「語られている」のである。「セクシュアリティ」についてこのようなさまざまなレベルでの権力が絡まっていて、確かに語りたくないという気持ちになる。語りたくないが、しかしすでに語られてしまっているゆえに、語らずにはおれない。沈黙が賛意に変わるといことはどうしようもない事実ゆえに、そこから「語り」という戦術に向かう諦めと戦略。

むしろこの「語られた」性のディスクールへの「違和感」をどう伝えたらいいのか、という問題、この文章のタイトルである「セクシュアリティの語り口」とは、まさにその伝え方の戦術そのものだ。つまり語られてしまった言説というあたかも下船不可能な船に乗りこんでしまった「私」がその言葉そのものと、そしてその言葉が築き、築きつつある関係をどのように語りなおし、あるいは形成しなおしていけばいいのか・・・という問題なのである。

だからこそ、再び「私」が出てこざるをえなくなるのだ。

別冊宝島の『ゲイの贈り物』のなかでセクシュアリティに関して伏見憲明が対談の中でこのように語る。

「ほんとにセクシュアリティというのは多様で、僕の理論というのはその多様性のひとつを、僕自身のセクシュアリティを言語化することによって提示したということではない」¹²

「語りなおし」としての「私」の存在、セクシュアリティを「私」で語ること、それはたしかに既存の性の言説に対する武器になる。つまり、ある偏見、枠組みを壊すものとして、「私」が語られるのだ。しかしその「私」とは告白型のそれではないのだ。告白とは、いわば聞く相手――例えば贖罪司祭――に「赦し」が与えられることによって成立する。それこそが「支配」としてフーコーは捕らえたわけだが、それはある「枠組み」、「共同体」に迎え入れられることを期待し、望むところで語る「私」である。いわば「子羊」のように頼れる良き牧者を求めている、「私」である。しかし、ここで再び出てくる私とは、自分を守る牧者がいないかもしれないが、それでも語ろうとする「私」である。

その際の語り口は、まずどうしても否定形のようにになってしまう。つまり“こういう風にセクシュアリティを「私」で語ることは出来ない”というように。たとえば、「私」で語ることがあたかもセクシュアリティについて語るもっとも適切な語り口であるという思いこみから、「私」のセクシュアリティについて語ろうとすること、これは、一見「私」を語ろうとして実はもっとも「真理」に近いセクシュアリティを語ろうという「理念語り」への誘惑となるのではないだろうか。確かにセクシュアリティ一般というものを直接語ることはできない。それはフェミニズムが「個人的なことは政治的なこと」というスローガンのなかで表明している。が、しかしフェミニズムの「私」を取り入れ、更に「セクシュアリティ」の語り口の探求を目指す「私」が語る行為はより正しい理念、「真理」への探求以外のなにものでもなくなる。「性を語る自分」というものを「性を誠実に考える探求者」として認識する(そして権力に絡め取られる)のはまさにフーコーの主張する「告白」の装置の一道具となっていくのではないか。「性」を語るということは目の前にいる相手に、どんな関係を結びたいのかを照らし出してしまう。または、それを無視して語ることにより、その語りがたとえ「私」を主語とし、みずからをさらすというリスクを犯すにしても、それが単に「性を誠実に語り、探求する」姿勢から「私」という主語を用いて語ろうとするのなら、それはまた違う形での「性を語るにはこの語りしかない」といった狭い姿勢に陥り、それ以外に語ろうとする者を排除する方向になる。そのような「真理」への探求をしてゆく「私」と

は一線を画したい。否定形で語ってしまう理由とはその真理への探求への身振りを否定したいためだ。むしろ「真理」を分散させる、そのような私というありかたこそが語りなおしの戦術として、まずは用いられうるのではないか。

今までのことを整理すると、ここで問題になる「私」とは「わたしたち女性」というところから零れ落ちるところの私、つまりさきほど触れた「なおも残る『私』」であり、かつ、「告白できる私」とも隔絶した「私」である。

しかし、このような「否定形」で語ることを誰に伝えればいいのか。この違和を覚えている人同士で結託すべきなのだろうか。この違和そのものもまた個々人で差異があるときに、それを「伝える」ことの意味はどこにあるのだろうか。否、単純にそれでも「伝える」ということは一体何なのだろう。

4 伝えるということ

今まで「私」で語ることの意味というものについて、語ってきた。しかし、ここで聞いている側が苛立って「私で語ることに意味があるなら、なぜ、さっさと栗田は私という主語を用いて話をしないのか？」という疑問が出てくるかもしれない。セックスについて語るわけでも「恋」について語るわけでもない。なぜ、このような「私」をめぐるまわりくどく迂回した語りになるのか？という疑問が出てくるかもしれない。

しかし、今ここに来てまさに「私は～です」とか「私は～あなたがたに要求しているのです」と語ること、そのことそのものに違和感を覚えているとしたらば、どうだろう。つまり、「語りなおし」としての「私」の重要性を踏まえながらも、何故こちらが語る側となり、あなたが聞く側でいられるのか、という問いを發するならば、どうだろう。伝えるということが、語る側と聞く側が固定されたままで、聞く側がせいぜい「良い勉強になりました」といったように、語りを消費出来る位置にいるとしたらば、何のために伝えるのだろうか。もしくは何のために聞いているのだろうか。伝える際にはどのくらい伝える相手が聞き取ろうとするのかということをも問うかたちになる。つまり、「こうしてくれ」とお願いするより、なぜ一方は語る立場となり、一方は聞く立場となるのかを問うことの意味をも考えてみたいのだ。もちろん、それはいわゆる「偶然」としてしか表現しえないものであるとしても、私が語るときに「私はなぜここで話し、あなたは聞くものとしてそこにいられるのか？」という問いを不問のままにさせることができるのだろうか？

私の書き方は非常にわかりにくい。それはあえてしているつもりである。それは伝

えるということの前提をまず提示し、その道筋につきあわせるといふ仕方をとっているのからである。この事態に関しては、奇妙にも橋本治の『ぼくたちの近代史』のなかにある、全共闘のアジビラのロジックがなぜ分かりづらいものであったのかという説明の部分と重なり合っているように思う。

「『分かるということは、ここまで分かることなのである。だから我々は全部提出したのであるから分かるはずだ』ってやると、もうそれは絶対に分かんないものになる。そんな面倒臭い道筋なんか誰も付き合わない。」¹³

何かを伝える前に「伝えるということとはここまで伝えるということなのだ」ということを伝えようとしているのであるから、わかりづらいことには違いない。その道筋に付き合おうとするものでなければ、つまり、付き合おうとする何らかのモチベーションでもなければ、「誰も付き合わない」のが普通である。伝えるということが一枚岩ではないとしたら、その次元はあらためて問われなければならないのではないか。それは先ほどのフーコーの権力の話にもつながるものである。聞くあなたはなぜ聞くという立場にいられるのか。そして、語る私とは何ゆえ語っているのかという問いになるのだ。

5 女は何を欲しているのかという問いに答えること

ところで。

ここまで時にはフェミニズムの論点を用いながら性を語るることについて考えてきたわけであるが、それゆえこの私の言説は、聞く側によっては「女は何を欲しているのか」ということを知りたい人の「情報」として存在することにもなる。

ここでアドリエヌ・リッチが引用した「フロイトの言葉」をみてみたい。「もし女性的ということについてもっと多くを知りたいければ、自分の人生経験にたずねなさい。あるいは詩人の書いたものを読みなさい。あるいは、学問がもっと深い、もっと筋の通った報告をだすことができるようになるまで待ちなさい」¹⁴

アドリエヌ・リッチはこの「筋の通った報告」をフェミニズムのさまざまな理論や動きと重ね合わせる。そのことについて異存を申し立てるつもりはない。しかし、その理論の「筋」とは、どのように通っているのかが重要になる。それは、このフロイトの問いに見られるように、「女性的」ということ、女性にまつわる要求、願望、などなどへの問い、すなわち「『女性』とは何を求めているのか？」という問いに対し、「私」で答えようとするとき、もしくは「わたしたち、女性」と言ったときも常に、それは

アイデンティティが固定されたものではない。常に余分な「エトセトラ」が「私」の述語に加わっている者として答えるその「答え」こそが、「情報」であったとしたら、女性的なことを知りたい、という（多くは男性の）欲望はくじかれることになる。女は何を欲しているのかということ「あなたは何を欲しているのか」と翻訳し、それに答えざるを得ないのが個々人の「女性」なのである。そのズレは一体どう考えるべきなのか。

そもそも女性は(男性もそうではあるが)、別に「選んで」なったわけではない。その事実を単に運命として記述できるが、しかしその「運命」ということであるならば、以下のこのような問いにパラフレーズして考えることも出来る。「これこそが、フロイトから出されていた問いに対応するもので、多分女性特有の質問であるとみなしてもよいだろう」とショシャナ・フェルマンは語る。その問いとは

「あなたは誰と運命を共有していると思っているのか？

あなたの力はどこからわいてくるのか？」¹⁵

しかしこの問いの「『誰と』と『どこから』とは選べないもの、与えられているもの、そして時としては不当に与えられてしまっているもの」である。このパラフレーズされた問いは、女性が、「私」と語り出すときに大きな意味を与えるのである。それはつまり、「ひとを巻き込む」性質のものであるということだ。「私」と語るときに、私が領有している物語、「私の秘密」を語ることなのではない。告白できる「私」ではないのである。「自分の実体を持たぬ人にとってなら 私 という語り手はまさにうってつけの用語でしょう」とあるように、何かを所有している存在、または属性が確固としている存在を私という言葉が表してはいない。正当性を主張するのでもなく、違和、もしくは違和を感じるであろう予感、自分の領有している物語ではなく、自伝を持たないことを物語る、そのような私のありかたをフェルマンは打ち出そうとしており、この論文でもそのような「私」のありかたを受け入れるかたちで進めてゆきたい。というのも、そのような「私」こそが、単なる「女性は何を欲しているのか」という問いに答える情報ソースとしてのみ存在するのではない、しかし、女性の「運命」を担わざるをえない者として語りうるのである。語る私は、とにかくある運命に巻き込まれていることを示すことによって、聞く者がいかなる運命にあるのかを照らし出す。そこから始めて「女性」という言葉が「私」の運命として位置付けられてゆく。それは逆に語る相手が「何故聞くものでありうるのか」と問いつづけることを可能にする。

最初の方に話を戻してみれば、セクシュアル・ハラスメントを「告白」はできない。なぜなら、それを聞く者に対し「他人が彼を認証する」ような語り口を期待しながら語ることは不可能であるからだ。そのように運命を誰と共有しているのかを問いつづけることは、語るものがみずからに問うのと同時に、聞くものに対しても問いつづけることを含むゆえに、支配権力に絡め取られる告白以外の語り口の提示につながる。

6 証言すること

フェルマンはさらにアドリエヌ・リッチの詩を引用する。

あなた たえまなく
自分の証言を続けるあなた
.....
旅人であり、証言者である人よ
言葉を奪われた情熱が
あなたの言葉を
無防備にする¹⁶

フェルマンは「詩人とは、単に目撃者であるだけではない。自身に対しても、他者に対しても、言葉を持たぬものたちに対しても、そして自分の自伝に対しても、これらどれに対しても、それに先だって証言するものとならなければならない」¹⁷(傍点引用者)という。

この「詩」を語るその主語こそが「自分の実体を持たない人にとっての私」¹⁸であり、かつ証言する者なのである。それは女性であることをそのまま表象する存在ではない、バトラーが言うところの「エトセトラ」が無限につづいてしまう存在ともいえるかもしれない。それは行為体としての私でありながら、何かを所有していない告白すべき物語をもたない私なのである。

7 おわりに

言葉が個人的でなくなるまでずっと後にもどってみなさい
これらの傷が目撃する¹⁹

セクシュアリティについて語ろうとする行為そのものはやはりリスクだ。それは性が抑圧されているから、ではなくセクシュアリティについて語ることは、自分の日々遂行している行為そのものと直結し、揺るがされる可能性が大きいからだ。セクシュアル・ハラスメントを証言するという場面に限らず、セクシュアリティやジェンダーについて前もって話すと決まっているような、いろいろな会合で話される折にも、常にその感情の揺らぎとは無縁ではなかった。²⁰この事実をまず重視したい。その揺らぎがなぜ起こるのか？ と問うよりその揺らぎから生まれる言葉の裏をまわらず、ひたすら言葉をつむぎ出すことが重要なのではないだろうか。しかも、それは告白ではなく、少々大げさな言い方をすれば、「一人の女が生き延びる物語」を語ることであり、「自伝において語られるのは、生と死の両方の経験の証言であり、ことに死ぬことについての証言」²¹である。「私にとって、必ずしも死ぬことが必要だったわけではなかったのですが、自分が成長してきた日々について語ることは、自分を殺してしまいたいという願望と密接に結びついていました」²²とあるように、そのように語ることでできる自分は、「女」という、ある社会的な地位を占める同一性のなかで生きようとした「自我」をむしろ殺すことから始まるのだ。そして、そこから語ろうとすることは「我々が手に入れることの出来る物語は、見えない物語であって、物語というより、物語になるはずの物語」²³なのである。

それゆえ、それらの言葉はしばしば「わからなさ」がつきまとうだろう。あのウーマンリブの田中美津のラディカルな発言「わかってもらおうとするのも、わからせてもらおうとするのも乞食の心」²⁴という言葉が想起される。安直な理解を退けるがしかし言葉は捨てないことが、いわゆる「真理」への探求からの距離を保つスキルのはじめのそしておわりの一歩なのかもしれない。

「私は、自分の自伝が失われているのだと、自分から告白するわけにはいかない。わたしに出来るのは、自伝の形をかりて証言行為をすることである」²⁵

この文章もまたひとつの証言行為となるのだろうか？私で語るというおきながら、実は「わたしは～である」と定義づけるように、語るものがなにもないということ、このおわりになるまでずっとひきのばしてきたのである。しかし、証言とは、認証してもらうために語るものでも、また自分がしかとわかったもの、自分の所有した知識を提示するものでもない。私がもし自伝を書くことができるならば、それはおそらく「私」が書いたものではないだろう。つまり「私は～である」と語るそのときには、常に「女とはなにか？」という問いをずらして語っていることでしかなく、認証された情報提供者ではない。「どこから力を得ているのか」を語る時点で模索すること、

そのような「運命」に巻き込まれた私で語るということは、「伝えた」と完了するような行為ではなく「伝えつづけている・伝えられるはず」の言葉を模索することでしかない。私はいまここで書きつづけてる、そして話しつづけているこの運命を考えるとということだ。しかし、もし敢えてそのような語りの相手は誰かと問うならばこのように答えてみたい。それは私で語り、私が書きつづけることを教えてくれた人々である。「私で語ること」を何より教えてくれた「姉」であり、思わず「私達」と呼びたくなる、そのような人々に答えたい。

痛みよあっちへいきなさいという

あの母の声を廊下でききたくて

力強くも恐れを知らぬ姉さんが欲しいのかしら

もうひとつお話をして、時間を買っているのです²⁶

注

- 1 驚田清一、『臨床哲学ニューズレター』創刊号、p.3。「(前略)このように見てくると 臨床哲学 は、そうした苦しみのおかれているひと、そしてその場所にもともにいあわせているひとと語らうことからはじまると言えそうです。看護や介護の現場、教育の現場、家庭という場所、被災の場所、そしてここらがもたえ、悩んでいるその場所に、まず立つのでなければなりません。すべてはそこからはじまります」
- 2 江原由美子・栗原彬(対談)『セクシュアル・ハラスメントの権力作用』、『現代思想』vol28-2、青土社、p.47-48。栗原「典型的なセクハラというのは、矢野事件のような、いわばドラマティックな形ではないんです。たとえば学生が先生に文献のことで聞きに行きます。そのときに前提になっているのは専門の権威に従うという内面支配のメカニズムです。最初に先生の側から出てくるのは教育とか指導の言葉です。そのときに、ちょっとやばいなあ、でも先生だからという意識が働いてくる。(後略)」
江原「(前略)セクハラと認識するには、ずっと『先生解釈』でやってきたものを全部ひっくり返さなければならない。最初は出来ないですよ。その枠組みで解釈して何とかここまでやってこれたわけだから。だからずっと戻って、ひょっとすると、と思い返していたり、たとえば先生が『あなたも合意の上だった』と言うのを聞いたときにはじめて『これってセクハラ?』とか『この人、意図的にやったんだ』という気づきになるわけです。自分の善意みたいなものがいかに愚弄されたかがわかる。そのときになってはじめて怒りがばーっと湧き上ってくると思うんですよ。」
- 3 本間直樹、「セクシュアリティに臨む哲学-セクシュアリティ研究会への誘惑」より、『臨床哲学のメチエ』創刊号、p.27。
- 4 アドリエンヌ・リッチ『嘘・秘密・沈黙 アドリエンヌ・リッチ女性論』、大島かおり訳、

晶文社、p.112

- 5 アドリエンヌ・リッチ、前掲書、p.14
- 6 ジュディス・バトラー、『ジェンダー・トラブル』、竹村和子訳、青土社、p.28「おそらく『セックス』と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ。そしてその結果として、セックスとジェンダーの区別は、結局、区別などではないということになる。」
- 7 このトラブルという着眼点は、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』に負っているところが大きい。p.7「ジェンダーの意味にまつわる現代のフェミニズムの議論は、たいていの場合、何らかのトラブルの感覚に行きついてしまう。(中略)だがトラブルを否定的なニュアンスだけで考える必要はないだろう。(中略)わたしは権力の巧妙な策略というものに、批判的な目を向けるようになった。つまり現行の法は、ひとをトラブルから遠ざけようとして、そんなことをすればトラブルに巻き込まれるぞと脅し、さらにはその人をトラブルの状態に陥らせようとするこすらある」
- 8 ジュディス・バトラー、前掲書、p.28-29「またそもそも『セックス』とはいったい何だろうか。それは自然なのか、解剖学上のものなのか、染色体なのか、ホルモンなのか(中略)セックスの自然な事実のように見えているものは、じつはそれとは別の政治的、社会的な利害に寄与するために、さまざまな科学的言説によって言説上、つくりあげられたものではないか。セックスの不変性に疑問をなげかけるとすれば、おそらく「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ。そしてその結果として、セックスとジェンダーの区別は、結局、区別などではないということになる。」
- 9 遙洋子、『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』、筑摩書房、2000年、p.13
- 10 ここからは1章で書いた「とりあえず『私』で書きかえる」という部分の留保の意味について説明したい。つまり、この「私」で語るときの意味とそれにともなう「落とし穴」についてフェミニズムの思想のなかでたびたび触れられていることを注記したい。『ジェンダー・トラブル』では以下のように記述されている。「たとえばボーヴォワールの中では、ジェンダーをする『わたし』、ジェンダーとなる『わたし』があるが、その『わたし』は、つねにジェンダーに関連付けられているにもかかわらず、ジェンダーに完全に同一化しないとなっている。主体とその文化的述部を区別する存在論的な距離がどんなに小さいものであろうとも、このコギトは、それが交渉していく文化の世界には完全に含まれていないのだ。肌の色やセクシュアリティや民族や階級や身体能力についての述部を作り上げようとするフェミニズムのアイデンティティ理論は、そのリストの最後を、いつも困ったように『エトセトラ』という語で締めくくる。修飾語をこのように次から次へと追加することによってこれらの位置はある状況にある主体を完全に説明しようとするが、つねにそれは完全なものにならない。しかしこの失敗は示唆的である。(中略)この無限の『エトセトラ』は、フェミニズムの政治の理論化に新しい出発点を提供してくれるものである。(中略)意味付けに先立つ『わたし』に頼ることによって行為体の問題を解決することは出来ない」(p.251-252)と。この「無限のエトセトラ、文化的述部」(p.252)からこぼれおちるものを即座に「私」と記述することの危険さを私も、認識する必要は

感じている。そのはみ出るもの、エトセトラを「私」とひとくくりにすることには、当然疑問があってしかるべきである。しかし、とにかくそこからはみ出るものと枠組みに入るもの、よって理解のしやすい事柄とせめぎあっているということとを、とりあえずは強調したいがためにここでは「私」という言葉で「性」を考え、そして伝えることを試みてゆく。しかし、この「私」というものへの厳しい指摘は、前-言語的な、政治から隔絶されたものとして、「私」がとらえられることの危険性を考えなければならないということであり、そこから簡単に「私」という主語の廃絶を主張できるものではないと考える。「自伝」ということについて精緻な分析をしたショシャナ・フェルマンは、男性の書いたテキストを「女」が読むとはいかなる行為なのかを説明する際、『女が書くとき女が読むとき』のなかで「女性の抵抗について『私』自身で入りこむ」(p.7)という表現をする。それによって、「自己内において、自己転覆を引き起こす見解」(p.14)を打ち出すことがねらいなのである。この自己転覆とは、「私」が性を正しく語るその欲望へと接続することを遮断するものとなる。しかしここでなおも残る『私』とは一体なにものなのか？ということを考える必要が出てくる。

- 11 ミシェル・フーコー、『性の歴史I 知への意志』、p.76。「個人としての人間は、長いこと、他の人間たちに基準を求め、また他者との絆を顕示することで（家族、忠誠、庇護などの関係がそれだが）、自己の存在を確認してきた。ところが、彼が自分自身について語り得るかあるいは語ることを余儀なくされている真実の言説によって、他人が彼を認証することとなった。真実の告白は、権力による個人の形成という社会的手続きの確信に登場してきたのである」
- 12 伏見憲明他編、『ゲイの贈り物』、JICC 出版局(現宝島社)、1992年 p.210
- 13 橋本治、『ぼくたちの近代史』、河出文庫、1992年、p.56
- 14 アドリエンヌ・リッチ、『女から生まれる』、晶文社、p.283より。もともとはフロイトの「女性性」と言う論文の終わりに付記されたものである。しかしここでは敢えて、フロイトにまで立ちかえらず、話を勧めたい。それは「誤読」も含めて、彼女たちが(フェルマンもまた『女が読むとき女が書くとき』のなかでこの部分を引用している)フロイトの文章を「理論家としてのフロイトではなく、夢を見た人間としてのフロイト」(『女が読むとき、女が書くとき』p.285)として捉えることによって、「女が女の経験を書く」(『女から生まれる』p.284)ことにいかに努力してきたかを考えたいからである。
- 15 ショシャナ・フェルマン、前掲書、p.207。ただしこの詩はアドリエンヌ・リッチの詩である。Adrienne Rich, "Source" in *Your Native Land, Your Life* (New York: Norton, 1986), 26. ただしこの問いかけは「彼女(リッチ)の詩のあちらこちら、彼女の本のあちらこちらから響いてくる」(p.207 『女が読むとき女が書くとき』)ものである。
- 16 ショシャナ・フェルマン、前掲書、p.223。ただし、これももともとはアドリエンヌ・リッチの詩の引用である。A. Rich, "Coast to Coast" in *A wild patience has taken me this far* (New York: Norton, 1981), 6-7.
- 17 ショシャナ・フェルマン、前掲書、p.223
- 18 ただし、これはヴァージニア・ウルフの『私だけの部屋』の言葉をフェルマンが引用したものである。ショシャナ・フェルマン、前掲書、p.233

- 19 これもリッチの詩の引用。2000A. Rich, "Meditations for a Savage Child," in *Diving into the wreck*, 57-58 ショシャナ・フェルマン、前掲書、p.224
- 20 この会合での感情の揺らぎということについては、『臨床哲学メチエ』vol.6. 年春夏合併号の栗田隆子「セクシュアリティにおける『語りにくさ』の問題-『セクシュアリティに臨む哲学の集い』からの報告」にその一例を載せている。
- 21 ショシャナ・フェルマン、前掲書、p.28
- 22 同上。ただしこの言葉そのものは、アフロ・アメリカンのフェミニスト、ベル・フックスの言葉である。Bell Hooks, "Writing autobiography," from *Talking back: Thinking feminist, thinking black in Warhol and Hendre*, *Feminisms*, 1036
- 23 ショシャナ・フェルマン、前掲書、p.29
- 24 田中美津、「わかってもらおうと思うは乞食の心」、『リブとフェミニズム』、岩波書店、1994年、p.81
- 25 ショシャナ・フェルマン、前掲書、p30
- 26 これはアフリカ系アメリカ人詩人オードリー・ロードの「死んだ女たちについて詩を書けばすべてうそになってしまう」からのフェルマンの引用である。Audre Lorde, *Our dead behind us* (New York: Norton, 1961), 61, ショシャナ・フェルマン、前掲書、p205

参考文献

- ・ジュディス・バトラー、『ジェンダートラブル』、青土社、1999年。
- ・ショシャナ・フェルマン、『女が読むとき女が書くとき』、1998年。
- ・ミシェル・フーコー、『性の歴史1 知への意志』、新潮社、1986年。
- ・アドリエヌ・リッチ、『嘘・秘密・沈黙』、大島かおり訳、晶文社、1989年
 ————— 『女から生まれる』、高橋芽香子訳、晶文社、1990年
- ・田中美津、「わかってもらおうと思うは乞食の心」、初出1972年(「日本のフェミニズム」岩波書店 井上輝子、上野千鶴子、江原由美子編、天野正子編集協力全7巻のうちの第1巻『リブとフェミニズム』1994年に収録)。
- ・橋本治、『ぼくたちの近代史』、河出文庫、1992年。
- ・遙洋子、『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』、筑摩書房、2000年。
- ・伏見憲明他、『ゲイの贈り物』(別冊宝島) JICC 出版局(現宝島社)、1992年。

本稿は『La Vue』No.3、るな工房/シャノワールカフェ(黒猫房) 2000/09/01号に掲載されたものを大幅に加筆、訂正したものである。